

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 平野 恵美子

本論文は、バレエ・リュスによる《火の鳥》の西欧初演（1910）に至るまでのロシア・バレエの発展を、ロシア国内の資料の丹念な調査に基づいて跡付け、著者の言うところの「ネオ・ナショナリズム」的な芸術の潮流の中で、バレエもまた美術と緊密な関係を持ちながらロシア独特のものを創り出していった過程を解明している。

論文は序文と結論の他、全4章からなる。

第1章では、タラスキンやボウルトなどの研究者の史観を援用しながら、19世紀後半に民話や民衆芸術への関心の高まりの中で興ったロシア文化・芸術の新しい潮流を、ロシアにおける「ネオ・ナショナリズム」として把握し、本論文の前提を文化史的に固める。

第2章では、『帝室劇場年鑑』に掲載された記録や資料に基づいて、1910年以前にロシアで上演されていたバレエの中にも、ロシアの民話や文学に題材を採ったものが少なからずあったことを具体的に示し、当時人気を博したバレエ《せむしの小馬》についての批評を特に詳しく分析する。

第3章では、ディアギレフが主宰する雑誌『芸術世界』の調査に基づいて、バレエ・リュスの芸術的志向の起源を考察するとともに、後に舞台美術を手がける画家たちがいかにして民衆芸術に関心を持つに至ったかを跡付けている。

第4章では、ここまで論じられてきたロシア・バレエの歴史的な文脈を前提とし、バレエ・リュスがいかに《火の鳥》制作に至ったかを検討し、この作品が《せむしの小馬》のような「低俗な紋切り型」（ベヌアによる）を乗り越える画期的なものであったことを明らかにする。

本論文の功績は、まず、これまで研究者にもほとんど活用されることのなかった『帝室劇場年鑑』という一次資料を、ロシア国立サンクトペテルブルク演劇音楽博物館で調査し、その分析をもとに19世紀末から20世紀初頭のロシア・バレエの様相を描き出した点にある。そして、その結果、これまで本格的に研究されることのなかった、ロシアの民話や文学を素材にしたロシア・バレエの発展の歴史が、当時のネオ・ナショナリズム的な潮流を背景として、初めて明らかになった。

これは従来のロシア・バレエ史研究における欠落を補うものとして高く評価できるだけでなく、ロシア文化史研究全般の基礎となる重要な貢献といえるだろう。付録として収められた失われたバレエのあらすじや、当時のレパートリー表、ディアギレフの重要な論文の翻訳なども、これまで日本でよく知られていなかったもので、資料的価値は極めて高い。

その一方で、本論文は大量のロシア語一次文献を博搜しているだけに、細部の解釈に不正確な点も散見された。また「ネオ・ナショナリズム」という鍵概念については、もう少し緻密な吟味が望まれる。しかし、上記の功績に比べればこういった欠点は二次的なものであり、本論文の高い学術的価値を全体として損なうものではない。よって審査委員会は、本論文が博士号授与に相応しいとの結論に達した。